香川の医療最前線 394

関節リウマチ
痛み長引けば受診を
エコー検査で早期診断も

宇多津病院長　猪尾昌之氏

◆いのお・まさゆき　１９８７年香川医科大医学部（現香川大医学部）卒。キナシ大林病院、香川医科大などを経て、２００３年６月に倉田典之現理事長とともに宇多津病院（旧宇多津浜クリニック）を開院。15年４月から現職。日本リウマチ学会専門医、指導医。日本腎臓学会認定専門医。徳島県出身。64歳。

国内に80万人の患者がいるとも言われる関節リウマチ。関節の痛みや腫れだけでなく、放置すると手や足が変形する可能性がある。原因は特定されておらず、発症すると完治せずに「一生の病気」となってしまうため、早期の治療で症状を抑えることが欠かせない。患者のニーズに合わせた地域医療を提供する宇多津病院の猪尾昌之院長に、治療の流れなどを聞いた。

―関節リウマチとは。

関節の潤滑油の役割を果たす滑膜が自己免疫的な異常によって炎症を起こして増殖し、関節の構造を破壊する病気。遺伝的要因や環境的要因などと考えられているが、定かではない。女性の患者が６～７割程度を占め、女性ホルモンが要因の一つとも言われている。年代は40、50代が中心だが、高齢化社会を迎え、発症年齢も高齢化する傾向にある。

―受診のタイミングは。

関節が痛いだけなら、けんしょう炎の可能性があるので様子を見るのでもかまわない。リウマチの痛みや腫れは、指の第一関節から始まることはないため、第一関節のみに痛みが生じる場合は、変形性関節症のケースが多いので経過観察してもよい。ただ、第二関節の痛みが６週間以上も続くケースや理由なく腫れてしまっている場合は、必ず受診してほしい。

―検査の方法は。

レントゲン検査では骨を見ることしかできず、詳細に調べようとすれば磁気共鳴画像装置（ＭＲＩ）による検査が必要だった。近年は患者の負担が少ない関節超音波（関節エコー）検査が普及してきており、エコーで小さな関節を調べて滑膜の炎症の有無と程度を見ることで、早期診断が可能になった。当院は約10年前からエコーを導入、自信を持って早期診断しており、県内では指導的な立場にもなっている。

―治療の手順は。

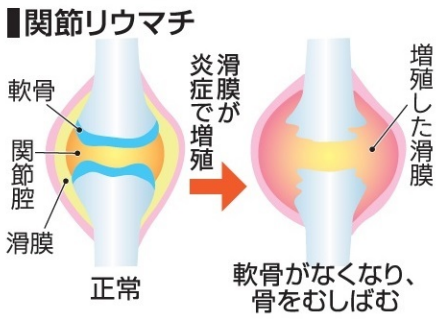
まずは内服薬の抗リウマチ薬「メトトレキサート」を使って滑膜の炎症を抑える。半年間かけて薬の有効性を判断し、安定期に入れば薬の量を減らしていく。効果が得られないケースや早期改善を目指す場合は、生物学的製剤やＪＡＫ阻害剤など、より強力に滑膜の炎症を抑える薬と併用するが、新しい薬は値段が高く、患者負担がネックだ。また、メトトレキサートは遅効性の薬であるため、効果が出るまで１カ月半程度が必要。痛みの早期軽減が必要な場合は、少量のステロイドを使用することもある。

―患者の不安は大きい。

薬の副作用が強いという過剰な恐怖心があり、民間療法を選択するケースもある。不正確な情報を信用せず、正確な情報を基に判断してほしい。きちんとした治療を選ばなければ、10年後の自分に降りかかってきてしまう。当院では患者の不安を取り除くためにもチーム医療を提供している。

―チーム医療とは。

１人の医師だけでなく、事務方を含めた院内の全員で患者の指導ができるよう徹底し、服薬指導やリハビリなど、病院全体で１人の患者をケアする体制を構築している。また、高齢化社会を迎え、今後はケアマネジャーや社会福祉士などとの連携、介護士との情報共有などに取り組まなければいけないと考えている。



■ 宇多津病院

リウマチ・膠原（こうげん）病、腎臓病の二つを専門とした地域医療を展開。外来診療は月曜日から土曜日の午前と午後（木曜午後は休診）。

所在地：宇多津町浜五番丁66－１
電　話：0877（56）7777
http://www.utz.or.jp/

健康

※無断転載、複製及び頒布は禁止します。　（c）四国新聞社